

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

■ 研究プロジェクト報告 「現代文化とキリスト教」

RCCセンター長 水野 隆一



本年度より始まった「現代文化とキリスト教」プロジェクトは、秋学期に二回の研究会を開きました。以下に、その要約を記します。

〈第二回研究会〉

日時：一月二日(木)
午後五時一〇分～六時四〇分
発表者：打樋 啓史
(RCC主任研究員、社会学部教授)

主 題：映画における Christ-figure
「Christ-figure」とは、聖書中のイエス・キリストの引喩(allusion)として、(イエスを

そこに重ねて)描かれる登場人物のことである。「Christ-figure」を映画の中に見出し、その描かれ方との対話を通して、批判的かつ生産的な神学的対話を試みる時、その研究が有益になる。

この発表では、『シックス・センス』におけるコール、『生きる』における渡邊勘治を取り上げて、分析する。

『シックス・センス』全体が宗教的なイメージに満ちた映画だが、主人公コールは死者を見る能力を持つているために、不安の中に生きている。コールが死者の話を聞いて、それを遺族に伝えることから、死者と生者の、そして、生者同士のコミュニケーションが回復されてゆく。コールのこのような姿には、周辺化された人々に近づき、傾聴、共感するキリストの姿が重ね合わされている。

『生きる』における渡邊勘治は、自分の死期を知って、それまでの生き方を変え、「何かを作る」ことへと向かい始める。映画は渡邊の通夜の場面

から始まるが、肉体が消滅した後も人々の心に彼が遺したものが生きつづけ、さらには、その後が続こうとする「弟子」となる人物が生まれたことが描かれている。キリストとその弟子の姿が重ね合わされている。

この二人は「Christ-figure」として描かれており、作者が、聖書やイエスを媒介として、その時代と場所における関心を表現しようとしていることが分かる。共通しているのは、決して完全ではないが、身近な他者の助力によって本質的な何かに気づき、成長し、弱い立場に置かれた他者の救済のために自らを用いるという点である。

〈第三回研究会〉

日時：一月一六日(木)
午後五時一〇分～六時四〇分
発表者：東 よしみ
(RCC主任研究員、神学部助教)

主 題：『聖☆おにいさん』におけるイエス像
この発表では、一、『聖☆おにいさん』でイエスはどのような人物として描かれているか、二、このイエス像は、現代日本文化におけるどのようなキリスト教観、宗教観を反映しているのか(社会的、文化的分析)、三、このイエス像は、

新約聖書におけるイエス像の理解にどのような示唆を持つのか(神学的対話)の三つに焦点を合わせて考える。

『聖☆おにいさん』におけるイエスについて、外見、性格、趣味などを分析すると、「愛すべきキャラ」として、より慎重で、落ち着いたブツダとの対比に置かれていることが分かる。

その上で、社会的・文化的分析を試みると、イエスは明るいアメリカ文化と結びつけられ、畏敬よりも、共感、親しみを惹起し、ときには、笑いの対象となっている。キリスト教は、日本社会において、佐藤八寿子が『ミッシェンズクール』の中で分析したような、「羨望と忌避の対象」でなくなっているのだろうか。

また、イエスの「神性」は否定されておらず、奇跡も起こすのに、聖なるものは畏敬の対象ではなく、共感や親しみと笑いの対象となっているように思われる。さらに、ブツダと共同生活することは、日本において宗教の共存している現状、あるいは、宗教の平和的共存に対する願望を反映していると言えるだろう。

このようなイエス像は、新約聖書におけるイエス像の理解において、「人間的」な面の重要

性を認識させる。新約聖書にもすでに、子どもたちに対する「憐れみ」を抱く様子（マルコ10:13〜16並行）や共感してなく様子（ヨハネ11:33〜35）が描かれていたし、パウロも「キリストの優しさ」と心の広さ」について述べていた（2コリント10:1）。ことに、キリスト教徒にとつては、自らのイエス像との

批判的な対話を促されることになるだろう。

二〇一四年度は、さらにさまざまな現代文化における表象を取り上げ、学期に二回程度の研究会を行う予定です。いずれの研究会も公開で行いますので、皆さまのご参加をお待ちしています。

■研究プロジェクト報告

「東アジアの平和と多元的な宗教・NGO・市民社会の役割」

RCC 副長 山本 俊正

本プロジェクトは、今年度から開始された。名称が長いので、通称「東アジアの平和」プロジェクトと呼んでいる。今年度の秋以降、二回の研究会を開催した。概要は以下の通りである。

「**第一回研究会**」
「東アジアの和解と平和―日韓キリスト教史の視点から―」
日時二〇一三年九月二七日（金）
発行者：徐 正敏氏（明治学院大学客員教授）

発表では、プロテスタント教会を中心に、日本と韓国のキリスト教の歴史が、日韓関係において、どのような位置をしめ、関係構築がなされて

来たかについて、説明がなされた。また、日韓キリスト教関係史というテーマを、韓国の視点からではなく、日本の初期のプロテスタント教会のアイデンティティから、考察が試みられた。徐氏は、日韓キリスト教関係史が、長い葛藤の歴史から和解の方向に向かっていることを、史実及び個人的な経験に基づき、指摘された。国家間の日韓関係が、依然として葛藤の歴史を克服できないのに対して、部分的ではあるが、エキュメニカル運動の成果として、日韓の和解の歴史が両国のキリスト者によって、歩まれていることを高く評価された。具体的に

は、韓国が軍事独裁政権の時代に、韓国のキリスト教の人々が担った民主化運動の一番の協力者として、彼らを理解し、心から助けてくれた仲間が、日本のキリスト者のグループであったことが、述べられた。日韓関係の和解の歴史は苦難の中における連帯運動によって、出発したことが指摘された。

「**第二回研究会**」

「東アジアの和解―WCC（世界教会協議会）第一〇回総会（釜山・韓国）報告」
日時二〇一四年一月二日（火）
発表題及び発表者：

- 一）「教会論の動きと礼拝」
神田 健次氏（神学部教授）
- 二）「宣教論の新たな展開と若手神学者との交流」
村瀬 義史（RCC主任研究員・総合政策学部専任講師）
- 三）「カトリック信徒から見たWCC総会」



徐 正敏氏

小林 和代氏（神学研究科博士課程）

神田氏からは、WCC総会での礼拝と教会論のテキストを中心に発表がなされた。開会礼拝の特色、これまでの信仰職制委員会の歩みに関連しての教会論のプロセス、東アジアという文脈での開催の意義について言及された。また、新に出された歴史的合意文書である『教会』の構成と特色、エキュメニカルな意義について説明された。村瀬氏からは、WCCの宣教・伝道に関する新たな指針について、三〇年ぶりに出された文書、『いのちに

向かって共に―変化する世界情勢における宣教と伝道』の解説がなされた。「聖霊」に強調点を置いた宣教論、「周縁からの宣教」などの鍵概念の背景について説明がなされた。

また、スライドを交えて、グローバル・エキュメニカル神学研修（GETI）での学び、交流が紹介された。小林氏は、カトリック教会とWCCの関係、資料に基づく総会への女性参加者の年代別比率、社会問題への教会、個人の関心の必要性などについて述べられた。

■研究プロジェクト報告

「関西学院におけるキリスト教主義教育の展開」

RCC 副長 樋口 進

「関西学院におけるキリスト教主義教育の展開」プロジェクトの秋学期の研究会（本年度第二回研究会）は、二〇一三年一月二五日（木）17:10〜18:40に吉岡記念館会議室一で行われた。講師は、立教池袋中学校・高等学校チャプレンで日本聖公会司祭の市原信太郎氏である。主題は「日本におけるキリスト教学校の礼拝の意味とは」というものであつ

た。市原氏はまず、立教池袋中学校・高等学校で行われている礼拝の模様をDVDで紹介されたが、聖公会の礼拝と異なることとわかれのチャペルとは異なる要素もあり、興味深かった。

次に、学校チャプレンとして、「学校」という場で働く位置づけについて述べられた。学校チャプレンは、百パーセント教員でもなく、カウンセラー



でもなく、「場」に対する牧会者である、という自己定義を示された。

次に、学校という「場」を「牧会」するとはどういうことか、ということについて述べられ、それは「礼拝共同体としての学校」を形成する働きである、と言われた。そして、具体例として、立教池袋中高の学校礼拝について紹介された。

次に、日本における学校礼拝の特徴として、構成要素としてはキリスト教の礼拝であるが、担い手の多くはキリスト教徒ではなく、参加者もほとんどがキリスト教徒ではない、ということ指摘された。

次に、学校と教会との関係について述べられた。学校礼拝は教会の礼拝よりも不完全であるが、学校礼拝は真の礼拝場所である教会への入口である。そして、学校礼拝が教会論的にどういう意味があるのかについて述べられた。そこで、洗礼によってキリストの体である教会に結び合わされることとが教会という共同体の基礎であるが、洗礼は瞬間的な「水浴び」ではなく、プロセスである。そして、学校礼拝をそのプロセスの一部として理解することが可能であるのではないか、と述べられた。

そこで、キリストの領域は世界と教会であるというオスカー・クルマンの「同心円」的理解を用い、日本の教会においては、はつきりと線を引くのではなく、大江健三郎の「あいまい (Ambiguous)」の概念を使い、日本における教会は「あいまい」であることをポジティブな価値として認めていくべきである、と述べられた。そして、普遍教会との交わりの中に、すなわち教会であるが、学校礼拝が洗礼のプロセスの一部として理解することが可能であるのではないか、と述べられた。

市原氏の発表は、学校礼拝

(チャペル)を教会論的に位置づけようとする努力であって、神学的でもあり、非常に興味深いものであった。

市原氏の発表の後、質疑応答の時間が持たれ、参加者による活発な議論がなされ、充実した研究会であった。

このプロジェクトの課題の一つは『建学の精神考第四集』の編集である。これは、ミッシェン展開推進委員会の「自校教育プログラムチーム」から協力要請の依頼を受けたことに対して、応えるものである。『建学の精神考』は、第三集が一九九八年に出された後、

一〇年以上出されていなかったが、創立一二五周年に当たる二〇一四年度中に『第四集』を出すことを目標にし、現在「チャペル週報」などの資料を集めている段階である。

FDに関しては、大学宗教主事会の方で計画を立て、本年度第二回研究会を一〇月四日(金) 13:30-15:00、吉岡記念館会議室一で行われた。今回は、山本俊正商学部宗教主事に、商学部のキリスト教の概要とチャペルの実際について報告してもらい、研修の時をもった。

WCC 釜山総会と宣教論の新しい展開

(研究プロジェクト発表より)

RCC 主任研究員 村瀬 義史

二〇一三年一〇月三〇日
十一月八日、世界教会協議会 (World Council of Churches, WCC) の第一〇回総会が韓国の釜山で開催された。一四〇を超える国と地域の諸教会および関連組織から約四千五百人が集い、「いのちの神よ、私たちが正義と平和に導いてください」という総主題のもと

で共に礼拝し、交流し、また共に世界の出来事に目を向け、教会と神学の諸課題を見出す時を過ごした。筆者は、総会に並行して開催された学術プログラムの参加者として、一二〇の教派を背景とする約一六〇人の若手研究者たちと共に、総会の全日程に参加することができた。

WCCは、歴史の中で多くの教派に分かれてきたキリスト諸教会が、多様性を保ちつつひとつになる(ヨハネ17:21)ことを求め、正義と平和を求めて共に奉仕し、また共に言葉と行動を通じて信仰を表明してゆこうとする運動——これを「エキュメニカル運動」という——を具現する諸教会の交わりである。一九世紀以来の様々な動きが収斂して、一九四八年に創立された。現在、メソジスト、聖公会、ルター派、改革派、バプテスト、合同教会など多くのプロテスタント諸教会および東方／オリエンタル正教会、さらに一部のペンテコステ派教会や古カトリック教会など、世界一〇の国と地域に広がる三四五の諸教会(教団)で構成されている。WCCは、各地域・各国レベルのエキュメニカル運動と連動しながら、WCCには非加盟のローマ・カトリック教会や、プロテスタントの中でも福音派やペンテコステ派などの諸教会と協力してその活動を進めている。

また、WCCは創立当初から、主に平和や人道的活動にかかわる諸機関・団体との協力関係にあり、ニューヨークの国連本部内にも連携事務局を設置している。様々な形の分



筆者が参加した学術プログラムの参加者たち

断が人間の共生を困難にしている現代において、また、全世界人口の約三分の一を擁するキリスト教において、エキシメンニカル運動はますます重要性を増しているのである。

今回は、東アジア初の総会であった。その背景には、韓国の教会の成長と世界の教会における存在感の増大がある。ここ十数年は若干減少傾向にあるものの、統計では韓国の人口の二〇%弱がプロテスタントに属しており、カトリックを含めると、人口的には仏教をしのぐ国内最大の宗教になる。さらに、世界一七〇カ国近くに二万人を超える宣教師を送り出しており、世界各地に韓国系の教会を持ち、広く世界の教会とのネットワークを持つているのである。筆者は、グローバルな対話力の

ある、韓国のいくつかの神学的試みに感銘を受けた。たとえば、あらゆる「いのち」の営みの関係性に着目して、いのちを脅かすライフスタイルその他の勢力に挑戦するオikos運動や、アジアの一元論的諸思想との対話を含む、聖書的な「いのち」に基づく知(Zoosophia)の構築である。一方、「力」を持つようになつた韓国の教会が抱える諸課題についても様々な形で学ぶことができた。

ところで、今総会のハイライトの一つは、WCCの宣教・伝道に関する立場を三〇年ぶりに明文化した『いのちに向かつて共に―変化する世界情勢における宣教と伝道―』のお披露目であった。この文書には、ここ数十年の間の世界情勢の変化と並んで、世界のキリスト教に広く現れてきた少なくとも三つの重要な変化が、色濃く反映している。

第一に、世界のキリスト教における地理的・教派的形勢の変化である。二〇世紀末以来、かつては「宣教地」とされていた南半球のキリスト教人口は、北半球のそれを上回っている。しかも、アフリカや中南米などにおいては、伝統的プロテスタント諸派に比べ、福音派とペンテコステ派の諸



開会礼拝の一場面(写真: Peter Williams/WCC)

教会が躍進している。さらに、移民の流入によって、教派的あるいは宗教的な多元状況が世界各地に現れ、教会が置かれている状況が劇的に変化しているのである。第二には、自然破壊が、温暖化などの気候変動の一因であることが強く認識される中で、他者関係だけでなく神の創造による全被造物の中で人がどうあるべきか、ということが重要な神学的課題になつていることである。この点に関して、海面上昇の危機にある南太平洋諸島の人々、そして、天然資源の搾取や乱開発の影響を被るアフリカの、経済的、社会的あるいは政治的に周縁に追いやられた人々と共にある共同体として、これらの地域の教会の声は総会において力強く響いていた。そして第三に、神に創造さ

れた世界全体への意識と共に、包括的な意味での「いのち」とその与え主としての「聖霊」に注目する言説が、前面に現れるようになってきていることである。「いのちに向かつて共に」によれば、教会の使命とは、豊かないのちをもたらし聖霊なる神の業に参与することにほかならない。創造論と聖霊論に力点を置くことによつて、WCCは、三位一体論の現代的意義を再確認しつつ、新しい語り口で視界の広い宣教論を構築しようと試みているのである。

宣教が、充ち満ちたいのちの実現として理解されていること、神によるいのちの豊かさとの刷新の希望が単に個人の心の問題ではなく被造世界全体に関わることで、そして、「周縁への宣教」から「周縁からの宣教」へのパラダイム転換は、WCCにおける宣教論に新しい展開を与えている。こうした宣教理解をもつて今後動いていくエキシメンニカル神学・運動を、日本の文脈でどのように受け止め、応えてゆかかが、日本の教会と神学の課題の一つになると思われる。

二〇一三年度

『キリスト教と文化研究』第一五号を発行

キリスト教と文化研究センターの紀要『キリスト教と文化研究』第一五号を、このほど発行した。今号は、樋口進副センター長退任記念号となる。主な掲載論文は、次のとおり。

○「旧約預言者の特質」
樋口進キリスト教と文化研究センター教授・宗教センター
宗教主事

○「ルカの洗礼者ヨハネ像」
嶺重淑人間福祉学部教授・
宗教主事

○「ヨハネ福音一〇章で語られる救済思想―その提示方法を中心に―」
前川裕理工学部専任講師・
宗教主事

○「Winter and Kagawa」
クリスチャンM.ヘアマンセン法学部教授・宣教師

○「イスカリオテのユダはどのように描かれているか―レディー・ガガ、『聖☆おにいさん』、『ジーザス・クライストス・スーパー・スター』」
水野隆一神学部教授

○「ヨハネ福音一〇章で語られる救済思想―その提示方法を中心に―」
前川裕理工学部専任講師・
宗教主事